

1949年 Edward Ullmanの見えざる論敵

杉 浦 芳 夫

アメリカにおける地理学の地位の低さは、研究・教育の頂点にあるハーバード大学に地理学科がないことと無関係ではない。それは、1948年の同大学地質・地理学科の地理学部門の閉鎖によっている。これをめぐる経緯は、Neil Smithの1987年AAAG誌掲載論文で知ることができる。それによると、事の発端は、学科の準教授のポストの一つが人文地理へ割り当てられることに、地質学者が反対したことにあるとされる。加えて、唯一人の人文地理教授Whittleseyが同性愛者であったという醜聞が、話を複雑にした。

1949年5月、地理学部門の再建を検討するために、全学から8名の委員が選ばれ、小委員会がつけられた。地理学者としては、当時、地域計画学科に属していたUllmanがそれに加わっていた。弱冠37歳、一介の準教授にすぎないUllman一人で地理学を擁護する重責を負わされたのである。この小委員会でのやりとりは、*Geography in New England* (1988) に収録されているThomas F. Glickの論文からうかがい知ることができる。

小委員会では、ハーバード大学における地理教育の必要性に鑑み、何よりも地理学の学問内容が問われた。Trewartha, Bowman, Hartshorneの著作が委員によって精読され、学外からはHartshorneとBowmanのほかStampも招かれ、意見を求められた。しかし、総合の科学という漠然とした地理学のイメージしか与えることができなかったこれらの著作ならびに彼らの発言は、委員達をただ混乱に陥れるばかりであった。それでも、委員の間には、自然地理と人文地理は不可分であるという合意はできあがった。

この合意の形成に大きく与ったのは、カリフォルニア大学バークレー校のSauerであった。彼も小委員会の場合へ招かれたものの、時間がないことを理由に出席しなかったが、自らの所見を手紙に託している。それによると、彼は、果して地理学者という専門家集団は存在しているのだろうか

という疑問を投げかけた上で、自然科学の知識を吸収しつつ、社会科学の分野で研究を行なう人文地理学者の在り方を示唆している。もちろん彼の念頭には、バークレー学派、なにかんづく自らの文化起源・伝播の研究があったことはいまでもない。Sauerの所見は各委員に好印象を与えたようである。

これに対し、それまで沈黙を守っていたUllmanは、Sauerは現在のアメリカ地理学の研究動向にもはや精通していないとし、Sauerが構想するような人文地理による地理学部門再建を断固拒否する。代わって、彼は、自らの交通地理学の研究を踏まえ、空間の科学としての地理学を主張する。1950年4月3日に提出された小委員会の最終報告には、Ullmanの意見も部分的に盛り込まれ、Sauerの手紙も一部添付されたが、明確な地理学像はついに示しえなかった。人文地理のスタッフによる大学院教育だけの地理学科の存続が勧告されたものの、財政的理由で、地理学部門の復活は結局実現しなかった。このときの体験を肝に銘じたUllmanが、後、ワシントン大学において実践力を有する科学的地理学の樹立に心をくいだしたことは、すでに我々のよく知るところである。

以上の事実から明らかなように、Ullmanにとっての論敵は、小委員会の他のメンバーではなく、Sauerであった。無意味な小地域研究に沈潜する中西部の地理学者、なかでも母校のシカゴ大学のOB連がとりしきるAAGをSauerが毛嫌いしていたことは有名である。エリート集団のAAGが現在の形になるきっかけとなった、若手地理学者によるASPGの旗揚げ集会上、Sauerはわざわざ東部まで足を運び、彼らに支持を与えている。Sauerの手紙がこうした彼の考えと呼応していることはいまでもない。ハーバード大学地理学再建の小委員会は、実は、Sauerと、やがて登場するであろう科学的地理学の「内なる闘い」の場であったのである。